

これをすなわち、余白の構築と結構に他ならない。我々は設計者として未知と対峙し、へ笑う家への平面図をひとつ提示する。

本過程は、コード化されたイメージを引用し、それらを平面に投影した図群にて現される。へ家の笑へは見る者の存在によってへ笑う家へと収束を指向する。

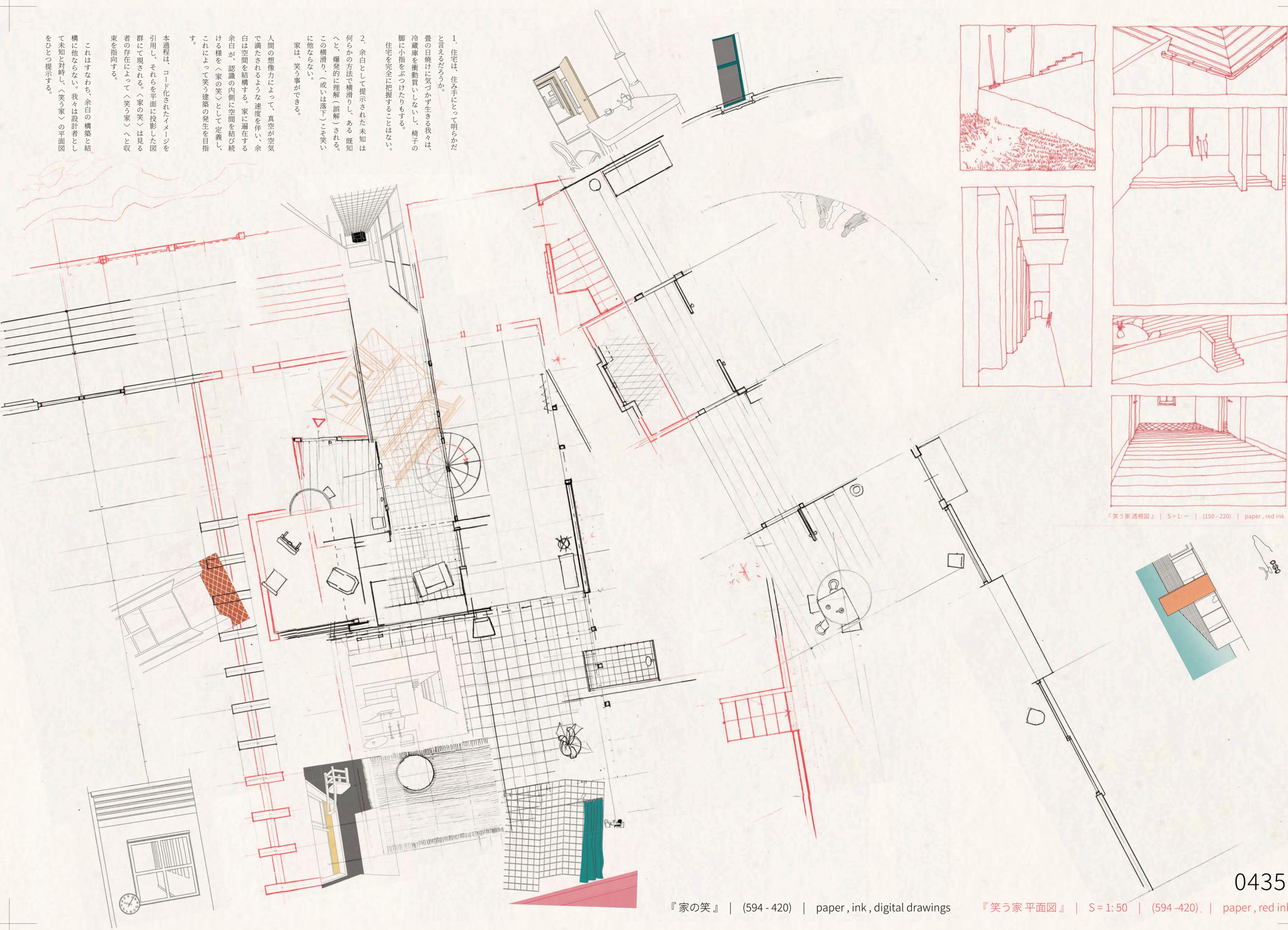
人間の想像力によって、真空が空気で満たされるような速度を伴い、余白は空間を結構する。家に遍在する余白が、認識の内側に空間を結び続ける様をへ家の笑へとして定義し、これによって笑う建築の発生を目指す。

家は、笑う事ができる。

2. 余白として提示された未知は何らかの方法で横滑りし、ある既知へと、爆発的に理解（誤解）される。この横滑り（或いは落下）こそ笑に他ならない。

住宅を完全に把握することはない。

1. 住宅は、住み手にして明らかだと言えるだろうか。畳の日焼けに気づかず生きる我々は、冷蔵庫を衝動買いしないし、椅子の脚に小指をぶつけたりもする。



『笑う家 透视图』 | S=1:— | (150-220) | paper, red ink